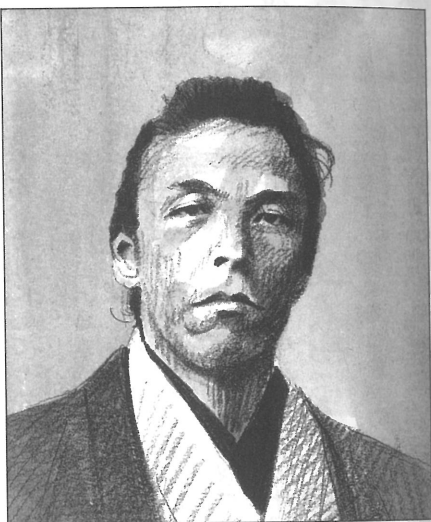


パリ万国博覧会――

日本の文物を出品した清水卯三郎



清水卯三郎

幼い頃から蘭学に憧れ、西洋文化に関心を抱いて成人した清水卯三郎は、幕府瓦解の直前、一八六七年のパリ万国博覧会に多数の日本文物を取り揃えて参加・出品した。博覧会の日本館に水茶屋をつくって人々の目を引き、いわゆる「ジャポニスム」ブームの先がけをつくった。帰国した卯三郎は、万国博覧会の日本開催を政府に建議するが、それは「時期尚早」の名で却下された。卯三郎の時代感覚は人よりも一歩も二歩も擢んでいた。

(埼玉県出身 一八二九～一九一〇)

## 現代人にみられぬエネルギーの発散

清水卯三郎という、いまや一般にはほとんど知る人もない明治期の一商人について、その息子である連郎はこう語っている。

——一体、私の父は非常に西洋好きで、その上すこぶる多趣多才の人で、私の口からいうのも変だが、頭脳がいつも時代より一步も二歩も先へ進んでいた人だ。その生涯をふり返って見ると、その進取的な気性に全く驚かされるのですが、その代り、そういう頭脳の鋭敏な、すばしい人の通弊として、常に頭脳が先へ先へと飛び移っていくので勢いどうも一事に執念深く関わり切って、それを貫徹するというような心持には乏しかったため、晩年はあまり振るわなかったようだが、それにしてもいろいろ、多方面の事業に先鞭をつけ、貢献したことは少なくない。

武蔵国北埼玉郡羽生町（今の埼玉県羽生市）の生まれ。横浜の商人であったと同時に、幕末対外交渉の通訳、化学書の翻訳者、活版・石版印刷機械の輸入、陶器着色法移入者であり、かな文字運動推進者、果ては歯科医療関係翻訳書出版社にまでおよぶ彼の一生は、こうして列記したところでは、一見、あまりにも多岐にわたり、脈絡がなく、そして息子の言のごとく「多趣多才」をもって、生きた人生のように思える。いわゆる「履歴書」だけでは、何がこの人物を、このようにつき動かしているのか、よく見えないのである。

思い出してみると、もう一人、幕末・明治を生きた同じような「多趣多才」の人物がいる——岸田吟香（二八三三―一九〇五）である。明治・大正期の代表的洋画家岸田劉生の父であるといえれば思い出す人も多い

だろう。吟香もまた、「幕末から明治にかけてつねに文明開化の第一線を走りつづけた企業精神旺盛の快男児」（芳賀徹『絵画の領分』）であって、あのアメリカ人医師ヘボンの辞書編纂の手伝いに始まり、江戸・横浜の蒸気乗合船の経営、「東京日日新聞」の発行、洋画家高橋由一のパトロン、銀座の水屋、目薬屋、石油開発や、中国大陸への進出まで、硬軟とりまぜて彼の手にかからなかった事業はないといってもよい。しかも、しがない商売をしていた若き日の吟香を、ヘボンに引き合わせたのは、ほかでもない同世代の清水卯三郎なのである。彼らの交友はのちのちまで続くこととなるが、それにしても単なる「商人」「事業家」という肩書ではとても語れない、幕末・明治初期のこうした人物像のもつエネルギーとその反面の「わけのわからないさ」は、サラリーマン生活が人生の典型となっている現代人にとって、何か圧倒されるものがある。

## 蘭学への興味と関心が引き金に

長い間、そのくわしい経歴についてはわからなかった清水卯三郎の生涯が、明確に見えてきたのはつい近年のことである。『わがよのき 上』という卯三郎自身の手になる自伝が、血縁筋より発見され、公刊されたのである。かな論者であった卯三郎らしく、全文かな書き、生誕より、幕末・パリ万国博出展までの約半生が記されている。その筆は、晩年（執筆時七十歳）とは思えぬほどみずみずしく、生き生きとして、それだから一層、同書下巻が失われてしまったのが、まことに惜しまれる。

自伝によれば、幼い頃彼は相当のやんちゃ坊主として通っていたらしい。十一歳になって漢学塾に送られると、家からの小遣いを皆使ってしまう。「はては晴着の衣まで質屋に送ってしまうありさまで、先生のほらが驚いて、とても子どものやることとは思えないと家に手紙を書く始末であったという。

この自伝には、こうしたユーモアにみちたエピソードが豊富に入っているのみならず、地方の一素封家

(造酒業・菓種商)に生まれた普通の若者が、いかに幕末・明治の動乱期とかかわって生きていったのか、具体的に納得のできる平易な、しかも達者な文章で綴られている。

一見多種多様にみえる卯三郎の一生だが、彼の前半生というより一生を決定したものの、それはやはり蘭学との出会いだろう。家督も譲り受けず、養子にも入らず、漢学青年であった彼が、なぜ蘭学に興味をもつようになったのか。それについて卯三郎自身は次のように語る。

家の二階にあった彼の勉強部屋の天井に、当時、江戸中期の洋風画家、司馬江漢がオランダ文字で「たとえ言葉」を五言、六言、書き綴ったものが「貼りまぜて」あった。彼は時々それを見て、あの文字が読めたら面白いだろうなあと思いつつ、教えてくれる人もないのであきらめていた——というのである。時代下つて明治の初期に、『海潮音』の訳詩集で有名な上田敏が、その幼い日に、オランダ・カルタの色彩に胸ときめかしたり、九州柳河のトンカ・ジョン(お坊ちゃん)であった北原白秋が、同じ司馬江漢の「尿する和蘭陀人」という油絵に、うっとり見入ったりするような、そんな「異国趣味」の源泉——それがすでに卯三郎の若き日にあるとは、何と新鮮な驚きだろう。時おりしも外国船渡来、ペリー来航の時代、いやでも「外国情報」が日常の噂で入ってくる。卯三郎は、下総・佐倉に遊んでは、オランダ流医師にABCを習い、大槻玄沢著の入門書『蘭学階梯』を、『訳鍵』という辞書で四苦八苦して読んでみては、その難しさを嘆き、「かくてはよき大人(先生)を得んと思ひ焦がるばかり」であった。

こうした外国語熱が、卯三郎の一生を貫いて動かすもつとも大きな原動力と考えるならば、先に列記した卯三郎の一連の行動——箕作阮甫の蘭学塾入門、生麦事件の際に英国艦へ文書訳解役として搭乗、パリ万国博出陳、化学書翻訳、洋書翻刻・出版業——などが、自然に一つの糸で結ばれてくる。オランダ文字が、まるで「かんな屑」のようにしか見えないので、それにかじりついていた若き日の彼を「かんな屑」と、まわ

りの人々は笑ったという。だが、杉田玄白の『蘭学事始』や福沢諭吉の『福翁自伝』(緒方洪庵塾での塾生生活)を思い出すまでもなく、蘭語・蘭学への青年たちの情熱は、時代の一つの大きなうねりでもあった。箕作塾で学んだのち、長崎伝習生になって蘭学を学ぶべく長崎に下つた(安政四年「一八五七頃」)卯三郎は、結局それを果たすことができなかった。しかし道中、佐賀では、「反射炉」をしつかりと見学している。蘭学志望の青年たちの興味は、自然に、最先端「技術」に向かつていくのは当然だろう。「この反射炉は黒金を溶かす炉なり。これはこの藩士、オランダの文より学び、心を尽し力を合わせ、外国の人の手を借らず建てたるものなるが、いと巧みに見えたり。こは日本にはじめていで来たりしものなり。げに手柄の勲といふべし」と、いたく感心している。

### 横浜商人として新開地で活躍

さて、清水卯三郎の生涯を貫くもう一つの太い軸、それは彼が開港まもない「横浜」の商人であったといふことだろう。安政五年、長崎より帰京した彼は、蘭学修業とばかりはいつていられなくなり、遠い親類筋と組んで、横浜に出店することとなる。

横浜は、安政五年に五か国と締結された修好通商条約にもとづいて、翌年六月開港された。戸数わずか百戸たらずの寒村が、商業都市として成長していくその初期には、一攫千金を夢みる悪徳業者が多かったことも、卯三郎の自伝からうかがえる。「油には水をさし、豆には小石をまぜ、うどん粉には石炭を加え、生糸にはきれぎれの物を差し加え」といった商売が横行し、捕まる者も多く、「獄屋に行くは隣りに遊び」に行くようなありさまだったという。卯三郎の田辺屋は、大豆を多く扱う店だったが、ある時友人の軽率なふるまいから、彼自身白州で取り調べを受ける羽目となり、無実とはいえ八か月間の町預けの身となる。とこ

ろが、この間、空しく時を費やすのは愚かなことと考え、通詞の立石徳十郎に申し入れて、毎朝「イギリス言葉」を習ったというから、やはり「かなな曆」卯三郎の外国語熱は、大したものである。彼はこの時期、立石氏の縁で、薩摩藩医師の松木弘安まつきこうあん（のちの外務卿寺島宗則てらしまむねのり）とも知り合っている。松木といえは、箕作秋坪あきひら・福沢諭吉とトリオで、のちに第二回遣欧使節団（文久二年一八六二）にも加わる俊英である。実はこのあとに、歴史の表舞台に出ていくこの人物を、横浜の商人卯三郎は重要な脇役として眺めていくことになる。

そのきつかけとなるのが、文久三年、前年起こった生麦事件の報復のために来航したイギリス艦と、薩摩藩との間に起こった薩英戦争である。『福翁自伝』には、次のような件が見える。

その一人というのは清水卯三郎という人で、この人は商人であるけれども英書も少し読み西洋のことについては至極熱心、まず当時においてはその身分に不似合な有志者である。初め英艦が薩摩に行こうというときに、もし薩摩の方から日本文の書翰を出されたときにはこれを読むに困る。通弁にはアレキサンドル・シーポルトがあるから差支ないけれども、日本文の書翰を颯々さつさつと読む人がない、というので英人から同行を頼まれた。清水は平生勇氣もあり随分そんなことの好きな人で、それは面白い行つてみようと言な易く承諾し、横浜税関の免状を申し受けて旗艦に乗り込「んだ」。

「わば商人という、政治的に中立の立場であつたからこそ、卯三郎はこうした歴史の大事件に、自然にまきこまれていったとみることが出来る。しかも福沢諭吉もいうように、オランダ語のほかに英語も少し身につけ、まわりからも「外国のことに至極熱心」と思われていた卯三郎である。自伝『わがよのき』のほうを読めば、この航海中に彼がもう一つ貴重な経験をしたことが語られている。

ある時、甲板にいと、イギリス人の若い「司人」が寄ってきて、「御国の数言葉」を教えてくださいと頼ま

れる。「一つ、二つ、三つ……」と何回か教えたところ、「八つ」までくると、すぐに彼が次の「九つ」と、それだけは卯三郎よりも早く言えるのである。不審に思つて、何でそれだけを早く覚えたのかと聞くと、「私の国にはココノット (coconuts)、という木の実がありますからね」と彼は答えたという。そこで卯三郎は、はつと思いつく。つまり言葉のまま、かな文字で書ける文章のほうがよいのだ——と。その上、船上では、若い船員たちが、熱心に上級船員になるための勉強をしている。「かの国」では、学識才能さえあれば、どんな人でも高い地位にはいあがれる。しかもABCア、ベ、セという「いろは」を知れば、拾い読みでも大意はつかめる。そうすれば複雑な事象も、かな文字で丁寧に説明できるのだから、教師のいない片田舎でも、奥まつた山中でも、志をもつた人ならば、独りでも学ぶことができるではないか！

それは、英語のアルファベットが表音文字であり、その意味で、日本語のかなは、漢字と違って同じ役割が果たせるという発見のみでない。かな文字こそが、日本の新しい時代の学問を育てるという見通しでもあつた。幕末、渡航体験もない卯三郎だったが、外国語という窓を通して、彼なりに日本の「近代化」に近づいていった過程が、ここに鮮やかにみえる。その後、「かな文字論者」としての一連の行動は、万延元年（一八六〇）『あんざりしことば』（英会話訳本）に始まり、明治七年（一八七四）一月『ものわりのはしご』（農学入門のための実験化学概要書・訳本）、同年五月「平仮名の説」（『明六雑誌』）、明治十四年から十五年頃「かなのとも」結成に参加、明治二十年物集高見編『ことばのはやし』（国語辞典）刊行、そして実に晩年の自伝『わがよのき』の執筆まで、きわめて首尾一貫している。しかも若き日の彼の蘭学・洋学修業が、自然に導き出した歩みであつたと、改めて評価されるべきだろう。

さて、彼の乗りこんだ英艦と薩摩藩とが、結局実戦にいたつたことはよく知られている。その折、先に述べた松木弘安と五代才助ごだいさいすけ（のちに関西実業界の大立て者となる五代友厚ごともつ）という二人の藩士が、英艦に乗り移る

という事件に、卯三郎は立ち会う。偶然にも松木とは旧知の仲、薩摩に帰ればもはや死刑ともなりかねない彼らの身の上を案じて、卯三郎は江戸への逃亡を助ける。しかも埼玉の実家羽生村、さらに奈良村（今の熊谷市）の親類に、一年ばかりもかくまうという難事をやってのけている。このように歴史の表舞台からほんの一步脇にあって、しかもそれらの渦中にまきこまれていく卯三郎の生涯を辿ってみると、歴史というものが実にこのような多くの人物たちの人生が、束となって動いてきたという実感をもつことができるだろう。

さて、卯三郎と外国との関係はさらに続く。慶応三年（一八六七）に開かれたパリ万国博覧会に、卯三郎は親類の商人・吉田六左衛門とともに参加・出品したのである。卯三郎の自伝『わがよのき』上巻は、その出航の時点で、つまり江戸末年で終わってしまっている。まことに残念ながら、花のパリで、彼が何を見聞し、どのような異国体験をしたのか——私たちには彼の肉声を聞くことができない。けれども以上のような卯三郎の前半生を動かしてきた要因——蘭学・洋学への飽くことなき興味、化学・産業技術等への関心、商人としての実績、かな文字論者としての活動などを考えるならば、明治維新以降の彼の精力的な後半生を支えたものを、私たちは推測することができる。

### 卯三郎、パリ万博へ

一八六七年パリ万博に参加したのは、第十五代將軍慶喜の弟徳川昭武の二行である。栗本鋤雲、渋沢栄一らが加わったのもこの使節団である。よく知られるように、この使節団の滞仏中（一八六八年）に、幕府は瓦解、徳川の世は終わりととなり、昭武は予定されていた留学を中止するかたちで帰国するのである。当時、卯三郎が買い集めた品々は、刀剣、火縄銃、弓矢、陣羽織、酒、しょう油、茶、調味料、化粧道具、鏡、人形、屏風、絵本、たんす、ちょうちん、農具、果ては鍼療具、釣り道具など、枚挙にいとまがない。卯三郎

は幕府の手代として二万両を借り受け、これらの品物を集めたわけだが、この万博では、佐賀藩と薩摩藩が幕府に対抗して独自の出品を行い、国家の代表権をめぐって緊迫したつばぜりあい演じられていた。卯三郎たちにとっては、「幕末」の様相が、異国の都においてもひしひしと感ぜられたに相違ない。清水卯三郎について一般的によく知られているのは、この万博の日本館に水茶屋をつくり、日本人女性三人に茶菓の接待をさせたというエピソードだろう。フランス側から見れば、「珍奇」な日本の文物がたくさん出品されたこの博覧会が、世紀末にブームとなるジャポニスムの先駆けとなった。当時、この茶屋を見物したフランス人作家プロスペル・メリメは、日本の娘たちを大いに気に入って、「彼女たちは牛乳入りの珈琲のような皮膚をし、それがはなはだ快適な色合」であって、また彼女たちの接待ぶりが、公衆の面前とは思えないほど落ちつき払っていたと報告している。またゴンクールは、「レアリスムの作家らしく、日本の女たちは「旦那様の恋愛的理想に叶おうと努めて、普段かんだり、ちぢんだりして」かわいらしい小動物のように生活している、と観察している。フランス人の手になる当時の銅版画を見ると、茶屋の舞台裏から心配そうに様子うかがっているのが、おそらく清水卯三郎その人ではなかったかと思われる。

一八六七年万博では、すっかり名物となった水茶屋だが、前半生の卯三郎を辿ってきた私たちには、彼がそのような商売の成功だけで満足したとは、とても思えない。彼にとつては生涯ただ一度の洋行である。「かなな肩」卯三郎が、西洋の産業と技術を目のあたりにする絶好のチャンスだったはずである。実際その観点から、彼の滞仏中の略歴を見直せば納得がいく。まず、日本で宮城玄魚に書かせた平仮名の版下のもとに字母を造らせ、かな文字の鑄造を試みている。先にも述べた通り、先進文明の摂取と、教育の普及のために「かな文字」の重要性をひしひしと感じていた卯三郎だっただけに、これは第一になすべきことであつたらう。それに加え、活版と石版の印刷機械の購入を行っている。幼少の時から「ものを作りだすことを好む

たち」であった彼は、染焼の勉強などもしていたが、パリでは陶器の着色法を学んでいる。卯三郎は万博出品の功により、ナポレオン三世より銀メダルを授与され、その後、欧米諸国を回って慶応四年（一八六六）五月七日江戸に帰朝する。

彼のもち帰ったヨーロッパみやげは、第一に、先にあげた印刷技術のほかに、鉱物標本、西洋花火（のち明治十四年一月『西洋烟花之法』翻訳出版）などの化学関係、そして第三には、あまり重視されていないようだが、明治五年（一八七二）に明治政府に出した万国博覧会日本開催を要請する建白書があげられるであろう。明治五年といえは、新政府の岩倉具視遣外使節団が、前年よりアメリカ、ヨーロッパで精力的に視察を行い、久米邦武が膨大な報告書（のちに『米欧回覧実記』として刊行）を書いていた時代である。天下万民の識見を広め、全国の利潤をはかり、英仏の右に出るために、万国博覧会日本開催をぜひともと迫り、その大役を自分に仰せつけ下さるようと、大胆にも願ひ出る卯三郎に、私たちは並々な情熱を感じることが出来る。この建白書は、「博覧会ヲ開クノ見込実ニ美事ナリ」と評されながら、同じく一八六七年パリ万博に佐賀藩の一人員として加わり、のちに農商務相となった佐野常民の名をもって、「時期尚早」ということで却下された。ところが何を隠そう、この佐野常民こそが、この翌年（明治六年）ウィーン万博に明治政府責任者として参加し、その膨大な報告書の中で、国家的な博覧会を開催する必要性と、その具体的計画とを説いていくことになるのである。卯三郎の先見性がいかにすぐれたものであったか、いうまでもないだろう。

晩年の卯三郎については、先に述べた「かな文字運動」のほかに、というより帰国後間もなく開店した瑞穂屋の主人としての主たる商売として、洋書販売、歯科器材輸入販売および歯科学書翻訳出版をあげねばならない。これもやはり、パリの帰途アメリカを見聞した折、とくに歯科医療の発達に驚いたことが起縁となつていふ。考えてみれば、政治機構から果てはカフェにいたるまで、西洋の万物を「領略」するが

ごとく視察した岩倉使節団でさえ、最新歯科医療を見聞したという記録はない。まさに民間人であり、商売人であった、そして応用化学の分野につねに興味をもっていた、卯三郎ならではの目のつけどころだったというべきだろう。瑞穂屋の歯科用品輸入は、明治九年に始まり、業界では広く知られる存在となっていく。また同時に、歯科学書の輸入、刊行に力を入れ、「歯科雑誌」（明治二十四～三十七年）も発行した。明治二十八年、引退する前年には、内国勸業博覧会で、歯科部門にて褒状まで受けている。

明治四十三年一月二十日、清水卯三郎は八十一歳の寿命を全うして他界した。戒名は、「瑞穂院先進穎壽居士」。穎とは、するどい才気という意味であるという。その卯三郎の明治三十一年作の和歌に、

国のため 心つくしもかひなくて いたつらにあふ 七十路の春

つねに歴史の脇役であり、しかも脇役だからこそ、時代の潮流にまともに押し流されることなく、自然体にかかわっていきける気安さ。しかもかな文字運動、万博建白書、西洋新技術の翻訳・輸入など、「物」と「思想」の両面で日本の近代化の一翼を、まさに担った一商人。こうした「非凡」なる民間人の、多種多様な試みと失敗、そして先駆的業績こそが、逆に私たちに幕末・明治という時代の秘密を明かしてくれるように思われる。

（今橋映子）

〈参考文献〉

- 井上和雄「みづほ屋卯三郎」（『書物三見』所収、一九三九年）、芳賀徹『大君の使節』中公新書（一九六八年）、長井五郎『清水卯三郎略伝』（一九七〇年）、長井五郎『焰のしみづうさぶらうの生涯』さきたま出版会（一九七九年）、大島清次『ジャポニスム』美術公論社（一九八〇年）、福沢諭吉『福翁自伝』岩波書店（一九八三年）、富田仁『横浜ふらんす物語』白水社（一九九〇年）、吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社（一九九二年）

日本の『創造力』  
近代・現代を開花させた四七〇人 第2巻

平成5年1月31日 第1刷発行

監修 牧野 昇 (三菱総合研究所取締役相談役)  
竹内 均 (東京大学名誉教授)

責任編集 富田 仁 (日本大学教授)

編集・発行 日本放送出版協会  
東京都渋谷区宇田川町41-1  
〒150 電話03-3464-7311 (代表)

編集協力 株式会社 組本社  
東京都大田区田園調布3-4-5  
〒145 電話03-3722-3417 (代表)  
印刷・製本 大日本印刷株式会社

落丁本・乱丁本は、お取替いたします  
定価は、表紙・ケースに表示してあります

©1993 NHK出版 Printed in Japan  
ISBN4-14-009206-8 C0321

大矢十四彦 装画  
河西捷治 装幀

NHK出版 定価5,800円 ISBN4-14-009206-8 C0321 P5800E  
(本体価格5,631円)



NHK出版

# 日本の『創造力』

近代・現代を開花させた四七〇人



NHK出版

監修

牧野 昇 三菱総合研究所取締役相談役・工学博士  
竹内 均 東京大学名誉教授・ニュートン編集長